

読書

本書は、一八八〇(明治十三年)にとりまとめられた、明治初期における美濃和紙の抄法を紹介した和綴りの稿本資料。美濃紙の由来や抄法を記した解説文と、紙すきの工程や用具類(す)きの工程や用具類

県図書館に行こう

こんな情報が待っている。

を精緻(せいち)に描いた三十六枚の手描き彩色絵図で構成されている。

岐阜県勸業課編輯(へんしゅう)とあるのみで

明だが、冬至のころの積

(ころぞ)刈りから始まる紙料作りの過程や、紙

の粘度をつける「ぬべし」の製法、二枚の麻(す)を巧みに使って日に五百枚を漉(す)きあげる抄法、出荷に向けての裁断

・梱包(こんぼう)方法

まで記録されており、当時の紙抄き作業の工程を

抄製図には、丁番(ちやんまげ)や丸雷(まるかみ)の着物姿の男や女たちが、厳冬の冷たい水に手を浸しながら、時間と手間をかけて美濃紙を作り上げていく様子が、繊細な筆致

明治の抄法、丹念に描写

『美濃紙抄製図説』稿本

と淡い色彩で描かれており、江戸時代とほとんど変わらぬ紙抄きの風俗を

使用するすべての用具類も、用途や材質、寸法の記録とともに、これ以上はないというほどに丹念に描かれている。

一九四二(昭和十七)

年に王子製紙が刊行した複製版によると、この図説は、一八八一年に開催された第二回内国勸業博覧会への出品を目的に製作されたものだという。

明治期以降、手漉き和紙の製造は機械化の導入やパルプなど補助原料の混合など大きく変化しているが、この図説に描かれた紙抄技法の伝統は、重要無形文化財「本美濃紙」として、今も継承されている。

県図書館のホームページで、デジタル化した図説が公開されている。

紙すきの工程や用具などを繊細な筆致の手描き絵図で解説した「美濃紙抄製図説」

